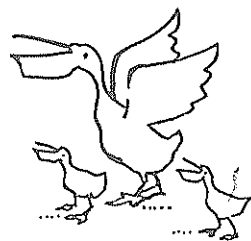


子供たちの健やかな

育ちを支えるために

岡村順一氏（高知学園短大助教授）



今、幼児期から青年期までの日本の子供たちの育ちぶりについて、多くの問題をほらんでいることが指摘されています。しかし、その時々問題として騒ぐだけではなかなか解決しません。幼児からの成育史の中で、家庭や社会環境を含めた発達筋道全体の中で、抽らえていく必要があります。

子供の問題は大人の問題、そして現在という時代の問題です。子育てが困難な状況にあればこそ、もう一度子供の歴史に立ち返って学び、それを基盤に問題を分析し、子育ての文化を新しく作り出すことが求められています。

ロイド・モースは『子供の歴史』という本の中で、古代から現代までの子育ての歴史を書いていきます。まず、古代社会の子育ては子殺的な様式で、子供を生かすも殺すも家長の権限でした。そして、中世から近世にかけては子供

的な様式です。僧院には回廊式の窓口があり、人に顔を見られずに子供を置いていけるなど子捨てが一般に広がっていました。十八世紀になると、子供の中に親が入り込んで良くも悪くもいろいろ干渉する子育てが一般化します。そして、現代では子供の発達を助ける子育ての様式が広がっています。子育てについて人間社会以前の度合いが高くなるに従って一度に産む子供の数が少なくなってきました。そして、少なくなるに従って親が子供を保護し育てる行動が現われ、その行動が持続化、複雑化されてきます。それが人間の段階になると、進化の量の差以上に他の動物とは違う質的な差がいろいろ出てきます。

スイスの動物学者ホルトマンは人間の子供は両親によって手厚く養育される様式があると言っている

ます。こうした人間の養育は、ある面では本能のような生物学的なものもありますが、社会生活なしには存立しない特質があります。原始的な共同社会での子供たちは、生活を支える労働力として価値ある存在で、厳しい体罰はあまりなかったようです。しかし、部族の人口が多くなると子供を殺すこともありました。

中世では、児童期は大人になるためのやむを得ない仮の姿であると考えられ、子供が子供らしい行動をとると厳しいしつけがなされました。

そして、中世の封建社会が崩壊し、いろいろな機械が発明され熟練士の仕事を子供ができるようになること、安く使えるということなどで強制的に働かされることも起こってきました。小学校一年生くらいの子供が一日十四時間も働かされ

た時代もかつてあったわけですが。歴史の中から現在の状況を見るとき、子供の問題を子供のせいにするだけでは解決しません。子供を育てるのは大人です。我々自体の子育てを考え直す必要があります。

かつて日本では、子供の生活は学校の勉強と労働と遊びから成り立っていました。現在では、まず学校の勉強と塾での勉強、そして遊びとテレビの生活です。三十年くらい前の子供と比較すると、労働とか手伝いの時間が短くなり、勉強とテレビを見る時間が増えまといわれますが、テレビの時間を遊びの時間に入れると必ずしも減ってはいません。

そこで問題になるのは、子供が発達していきけるような遊びをしているかどうか、そしてもう一つは、手伝いの時間が非常に少なくなっていることです。

本当の手伝いというのは、大人

と一緒に一つのことをしていくことです。子供はお父さん、お母さんと一緒にやりながら、そこでいろいろ我慢もして忍耐力もつけていきます。そして、やり遂げたら親から「よくやった。ありがとう」と言われます。すると子供は、お父さん、お母さんはすごいなあ、あこがれを持ちながら自分で遊ぶときにいろいろ工夫をしたりします。ですから手伝いをもう一度見直して、生活の中にきちんと取り入れていく必要があります。

また、遊びにしても体が強くなったり、友達どうしの交流で社交性が身に付いたり、情緒的に安定するとか、いろんな要素を多く含む遊びを生活の中に取り入れることが大切だと思います。そして、それを保証するのは大人の役割です。子供たちの発達する権利は、この社会に生きる大人を通じて実現されなければなりません。

今、世の中がインスタント化されています。しかし、子供を育てることに手はかけなければなりません。子供は我々の歴史をつなぐ掛け橋です。その子供を守っていくためには断絶された子育てではなかなかうまくいきません。共にはぐくむ教育、共育の道をもう一度探り直していくことが必要です。